

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第九章

Hiro's summer - 1

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[9・Hiro's summer-1](#)

[128.](#)

[129.](#)

[130.](#)

[131.](#)

[132.](#)

[133.](#)

[134.](#)

[135.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生 陸上部所属
河合 ヤスオ	ひろの同級生 陸上部マネージャー

9・Hiro's summer-1

128.

ひろは向こう四ヶ月分の日程表と計画表の束を手にしてうなっていた。「まいったなー」

週末ごとに遠征だの記録会だのがあって土日は全部埋まってしまっている。ゴールデンウィークなどももちろんない。

計画表を繰ってみると、ひろ個人の毎日の練習メニューがびっしり書き込まれていて思わず気が遠くなった。河合マネージャーの力作だった。

「やるなー、河合マネ。なんて関心してる場合じゃないわ、こんなにスケジュールきちきちに組まれたんじゃ、あたしのプライベートはどーなるの！？ あたしの十七歳の春をどーしてくれるのよ！！」

「十七はおめえだけじゃねえってえの！ 三年はみんなそうじゃねえか！」

「そーいう問題じゃないわよ！ ほんつとにデリカシーないんだから！ これじゃデートしてる間もありやしないわ！！」

「なんだ、そんなことか、デートならおれが毎日トラックの上でつきあってやってるじゃねえか」

「うう」

「なあひろ、おれはさ、おまえのことならなんだって知ってるんだぜ」

「ど、どんなことよ」

「過去二年間、どの記録会でどんな記録だったか、ぜんぶそらでいえる」

「河合くん……」

「おめえの生年月日、血液型、平熱、心拍数、バイオリズム周期、スリーサイズ、身長、体重、先週の実力テストのできまで」

「どさくさにまぎれてへんなこと言わなかった？」

「え？ どれかな？」

「もお～～～、あたしのスリーサイズやテストの出来なんか河合くんには関係ないでしょ！！」

「そうはいくか！ 部員のすべてを知らなければ、マネージャーはつとまらねえ！！」

「そんなことまで知ってるマネージャーなんていないわよ！」

「そうカッカするなって、ひろ。だからさ、おめえはおれにすべてをまかせてりゃいいんだってことさ。めんどうなことは全部おれが引き受ける、って前にもいっただろ？ おめえは走ることだけ考えてりゃいい。とにかく記録を出すことに専念してくれ！ な！？」

「う……うん……」

じゃ、よろしく、と言って河合マネはさっさとどこかへ消えてしまったが、月間の練習メニューをもう一度まじまじと眺めてふと気がついた。月に一度くらい、妙に練習が軽い期間がある。

「ん……？ え……？ これ、まさかあたしの生……」

血がかあ一つと顔にあがってひろは真っ赤になった。「なななななな……！！」

両手で思い切り引き破って床に叩きつけて上履きの裏で踏みにじろうとしたがかろうじて思いとどまった。さらにもう一度、くだんの練習メニューをまじまじとながめる。

それはヘタだが几帳面な字でこまごまと書き込んだもので、コピーやプリントアウトしたものではなかったのだ。データの類は河合の手元にあるのだろうが、メニュー表はひろ専用、コピーでもとられていないかぎり、中身はおそらく河合のほかは誰も知らないということなのだ。

ほかの子もこういうのもらったのかしら……

陸上部の練習には前の週から入部希望者が加わっていた。インターハイ出場を目標に掲げている部の練習となれば、緊張している者、浮き足立っている者、さまざま。なんとはなし落ち着いた雰囲気の中で、ひろは黙々と自分のメニューをこなした。

なにも考えず、ただ自分の心身を燃やすのはこのうえなく気持ちのいいことだった。

このままどこまでも走って行きたい、とそう思う。県大会へ、全国大会のフィールドへ、そして――

ひとり帰る道で、ひろは考えた。

そしてその先――今年の夏が終わったら――

私はどうするつもりなんだろう――

体は走ることを望んでいる。

声が聞きたいと思った。彼と話したい。

手が思わず携帯電話をまさぐる。せめて同じ国内にいてくれたら、と思う。そうしたらためらいもなくボタンを押す。押しかけていく。今すぐに会いたい。

マンションの自分の部屋へ帰るなり、ひろは携帯電話を握った。時差が一時間半くらいしかないのがせめてもの救いだ。彼からこんな時間に電話がきたこともなければひろからしたこともないが思い切ってかけてみた。呼出音がする。

(……)

切ろうとしたとたん、相手が出た。

「もしもし！」

「あ――ひろです」

「ああごめん、シャワー使っててコールが聞こえなかった！ 待たせたか？」

「ううん、ぜんぜん。……今忙しい？」

「う……ん、着替えに戻って来たところなんだ、これからバイトさ、レストランのウェイターやるんだ」

彼にはホテルのホストとして宿泊客にシャンパンサービスをする仕事があるのだが、日本の高校生に『ホスト』などと言ったら違う意味にとられそうなのでウェイターのバイトにしておいた。今からラフな大学生スタイルからタキシードとブラックタイの正装に変身しなければならない。

「なに、ちょっと顔出してくるだけだから。すぐに戻る」

「……ずいぶん、ゆるいバイトね」

彼はのどで笑った。この低くて甘い笑い声をきくときまってひろは胸がいたくなる。

「ああ、オーナーが甘いやつでさ」

「いいの？ そんなこと言って？」

「かまうもんか」 黒髪をゆるくオールバックに梳かしあげながら言う。

「よし」

「なにが？」

「いやなんでもない、わるいな、ひろ、あとで電話するよ、オレも話があるんだ」

「……なに？」

「会いたい」

「……私も。……今夜、これから行っても、いい？ ……なんてね」

「——いいよ」

「——」

「いっしょに食事しよう。今夜のオードブルはサーモンと海老だったかな、メインはもちろんビーフ、デザートにジェラートがつく」

「わあ、すごい、フルコースねー、あたし何着てこうかな」

「そのままでいい。おまえの制服姿がみたい」

「……うん、じゃ制服で行く」

「ああ。——待ってる」

130.

ちょっと話がある、とひろはまた休み時間に河合に呼び出された。

「おめえ」河合はひどく不機嫌に口を開いた。「なにやってんだよ？」

「なに……って、え、なにもしてないわよ」

「とぼけるんじねえよ！」

「とぼけてなんかいないわよ、なににってんのよ、ほんとにまだなんにもしてないわよ！！」

「あのなあ、おれの目をごまかそうとしたってムダだ、おれはちゃんと知ってるんだ！」

「う、ううううそ、そんなことまで——！」

「あたりめえだ！ おれはおめえのことならなんだって知ってるっていったろ！ おめえが最近二年の佐々木と本木を相手に——」

「あ……なんだ、さっちゃんともっちゃんのこと？」

「そうだ、そのさっちゃんともっちゃんだ、おめえ、あいつら相手にごちゃごちゃごちゃごちゃと……！」

佐々木と本木は二年生の陸上部員で、ひろの後輩である。佐々木は高飛び、本木は短距離でひろといっしょの種目だ。

「うん、あのねえ、ブラスバンドの三年の木下くん、知ってるでしょ？ さっちゃんは木下くんが好きなの、でも木下くんはもっちゃんが好きなんだって」

「ほう！　なんてベタな三角関係だ！」

「そうなのよ！」

「そうなのよ、じゃねえよ！　おめえそんなことに首突っ込んでる時かよ！　他人の三角関係なんかほっとけ！」

「そんなこといったって！！　さっちゃんともっちゃんはおんなじ部だし、木下くんはおんなじクラスだし、ほっとけないわよ！！　さっちゃんも木下くんも真剣なのよ！！」

「それで、本木は？」

「もっちゃん……もっちゃんはあたしが好きなんだって」

「はあ！？」

「ね！？　だから他人事じゃないのよ！！」

「う〜〜〜〜、じゃおめえは？　おめえは誰が好きなんだよ！？」

「あたし！？　あたし……あ、あたしが好きなのは……え……と」

「待て！ みなまで言うな！ おれにはちゃんとわかる！ おめえの目にはおれしか映ってねえ！！」

「ふたりしかいないんだからあたりまえじゃない」

「なあ、ひろ。今いちばんだいじなことって、なんだ？」

「いちばん、だいじなこと？」

「……言わなくてもわかってるよな？ おれはマネージャーとして選手の練習場を確保して、練習メニュー調整して、体調狂わせねえように気い使って、etc、etc、……！ 少しでもいい状態で次の強化合宿を乗り切りてえ！ 地区予選まですぐだ、ひと月たらずなんだ。それまでにクリアしたいことが山ほどある。が、地区予選は一里塚だ、そこからまた新しい課題に挑戦しなきゃなんねえんだ、走るのはおめえでおれじゃねえんだ、わかってるよな！？」

「——わかってるわよ」

「よし、いいこだ。おめえは走ることだけ考えろ。よそ見してるひまなんかねえぞ！」

「でも！ それはそうだけど！ ねえ河合くん、ひとの気持ちを考えるのは、よそ見なの！？」

「今やらなきゃいけねえことなのかよ」

「————」

「夏までだ、ひろ、インターハイが終わるまでは！！ ひとの気持ちはちょっと横へよけておけ！ 佐々木と本木と木下にはおれが話しておく！」

「か……河合くん……」

「おれもおまえに告白するのはインターハイ終わってからにする！」

なにが『インターハイおわるまでは！』よ、あたしにいちばんプレッシャーかけてるの、河合くんじゃない！

河合の告白など何度も聞かされていて、なにをいまさら、な観のあるひろだったが……

いつもかわらない気持ちを向けてくれるのはうれしい、けどさ——

昨年秋からの河合のマネージャーとしての仕事振りにはたしかに目を見張るものがあった。秋といえば、ひろの右足ねん挫が治り、調子が安定しだした頃だ。

——もっとも去年の夏に起こったもろもろの出来事を振り返るまいとしたひろが部活に打ち込んだ結果だったのだが——その頃から彼はしきりと『インターハイ』を口にするようになったのだ。

もしかして、河合くんは本気なのかもしれない——そう考えて、ひろはなんとなくぞくつとした気分を味わった。部活に本気なのは別にかまわないし、部員にしてみればぜひそうあってほしい。河合のようなムードメーカーの存在はありがたい。しかしそれ以外のことでは……気持ちがすれちがうというか温度の差を感じてしまうのだ——。

なにかあったのか？ と電話の向こうから問われた。

「え——どうして？」

「いつもとちょっと違う。調子、よくないのか？」

ひろは、そうじゃないんだけど、と口ごもりながら近況報告をした。河合のことも、ありのままに。

「三年になればみんな色々、考えるものさ。高校生活の締めくくりと、先のことと。両方あるから。オレにも覚えがある」

「うん……」

「そいつ、部活も恋愛も、どっちも本気なんだろう」

「河合くん？」

「ああ。正直なとこ、そいつが羨ましい。自分を燃やせるもののそばにいて、いつも関わってられるのは幸せなことだ」

「う……ん、部活に本気で燃えてくれるのはいいんだけどね……」

と、ひろは河合と話した後から引っかかっていたことを口にした。

「部活と関係ないところで、そいつの気持ちがおまえには負担だと、そういうことか？」

「そう、なんだけど……桧山さんて、けっこうはっきり言っちゃうひとだね」

「判断に迷って保留にしておくのはやむを得ない、だが、うやむやはよくない。おまえが負担に感じるんだったら、そう伝えた方がいい。ことにそいつが本気ならばなおのこと」

桧山健、豊富な経験からの実感に満ちた言葉である。

「そう？ ……相手がいやな思いするかもしれないかも？」

「ひろ、こういうことで一番罪なのは、相手に期待を持たせることだ」

「——あ」

「……もし、おまえが負担に思うなら……オレは……」

「待って桧山さん！」

「インターハイおわるまで電話しない」

「待ってよ——」

「今まで話したことなかったけど、オレ、中学のときにテニスやってたんだ。けっこう強かったんだ、三年の時の全国大会でファイナルまでいって負けちまったけど、海外遠征もした」

「……………」

「家庭の事情ってことでそれ以上続けられなかったけど——いずれこっちへ帰らなきゃならなかったから——オレ自身好きでやってたことで、それ以上先へ進むのを諦めるのは本当に残念だったし、期待してた人たちはみんながっかりしてたよ。友達も失くした、養父母や兄弟たちまで周囲からいろいろ言われたらしい。世間はいいい方にはとらないものなんだ。期待に応えられない、人の気持ちに応えられない辛さは……オレにもわかる」

「……………」

「おまえが走りたい気持ちも……わかる……つもりだ」

「桧山さん……」

「そして……オレもまた、あとには引けない。こんなに自分の気持ちを偽りたくないと思ったのは生まれて初めてだ」

「……………」

「おまえを見ている。それしかできない。おまえの誕生日も好みの食べ物も知らない、今はなにもしてやれない、けど、心だけは、いつもおまえのそばにいる。おまえの苦しみ、喜び、おまえの将来。すべてオレが引き受ける。きっと、おまえを幸せにしてみせる」

「う……ん」

「だから——存分に走れ。インターハイおわるまで、オレからは電話はしない」

「待って、桧山さん！ あのね！」

「うん？」

「あのね……なにがあったの？ あの日」

「あの日って——三人で、八島へ行った、あの日か」

何があったのか思い出せないのだ。春浅い八島の湿原に踏み入った、あの日。

まるで——深い眠りに落ちてしまったようだった。夢も見ずにぐっすり眠り、目が覚めたら、ひろは今にも咲きそうな桜の蕾を横目にトラックを走っていた。

いつ八島から帰ってきたのか。そういえば健とレルはもう日本にいないのだと気がついたときは、『あの日』から何日も経っていた。

(どうしたことよ——)

あの日、八島ビジターセンターの駐車場で車を降りて……それから……

「ああ、あの日？」なおみ専務は、「夜の九時ころだったかしら、ひろちゃんたちが帰ってきたのは。ええ、三人、車から降りて別れを惜しんでたじゃない。それがどうかしたの？」そう言うのだが。

三人とも、普通に会話していたという。まるっきり、憶えてないんですけど。

それでひじょうに聞きづらかったが、健にさりげなく訪ねてみた。帰路は無事だったか、というようなことを。すると、

『あー』

(……『あー』ってなによ……)

『それが……よく思い出せなくて。気がついたらメルボルンに着いてた。レル？　そういえば彼とはシンガポールで別れたかもしれない』と、なにげに要領を得ないのだった。

『……なあ、ひろ』

「はい？」

『いや……いい、なんでもない』

「どうしたの——桧山さんも、なんか、お疲れみたいね——」

『ん～やっぱ、緊張してたんだろうな、生まれて初めてだったから』

「え——初めて、って——」

「え？　プロポーズのことだよ、ほかに何があるんだよ」

「そ、そそそそそうよね」

それは夢じゃあなかったのだった。

なにげにモヤモヤしつつ、健は携帯電話を眺めていた。

気がついたらメルボルンに着いていたというのは本当で、飛行機を乗り換えてうとうとしていたらアデレードに着いていた。

そもそも——八島から水津早町まで車を運転したはずなんだが、まるっきり覚えがない。まあ、眠ってしまったか、気を失ってしまったとしてもレルがいたんだから大丈夫さ……幸か不幸かレルがいたんだから……プロポーズしたばかりの女の子に何かしたりは、してないはずだ。

帰宅後、旅行の荷物を整理していて、パーカーのポケットに何か入っているのに気がついた。何か硬さのあるもの。

なんだっけ？ ああ、このパーカー、レルに貸したんだった

引っ張り出してみると、パスケースだった。あいつでもうっかりすることがあるのか、要るものかな、とひっくり返してみる。と——透明面に名刺らしいものはいっているのが見えた。

Antonio Paujini
Agent
Foundation H&L

——パウジーニさん？ Foundation H&L の、エーエージェント？

深く考えずに、次の日レルに郵送した。そのうち、なにか言ってくるだろうと、そのままになっている。

陸上競技のトレーニングとは地味なものだ。地味すぎて描写することが見つからないくらい地道なもの。陸上に限らなくても練習とはそういうものだ。

河合マネージャーは彼の陸上部の各種目別に念入りな練習メニューを組んであった。いずれの競技にも格別目新しい練習方法があるわけではなく、部の伝統的な練習をベースに組み直しただけのものだが、丁寧に作られた計画表を見せられ、巧みな話術によってその効能を説かれると、部員たちはすっかりその気になってしまうのだった。

彼らの身も心も河合の練習メニューに沿ってそのシナリオの行き着く先を思い描き、そのイメージの実現に向けてトレーニングの道を熱くひた走るのだ。

口から先に生まれたお調子者の印象が強い河合マネの意外な几帳面さに思わず引いた部員も何人かいたが、彼のふだんの涙ぐましいばかりの気配りを知っている者たちはわりあいすんなりと納得したものだ。

河合マネは『うちの陸上部』のことだけを考えてくれるありがたい存在なのだ。そして彼のハイな性格と雄な弁術は、まったくムードメーカーそのものだったのである。

短距離走(スプリント)のトレーニングもまた描写に困るほど地味なのだが……間宮ひろは身も心も燃えていた。新学期始まって早々に河合マネからこっそり手渡された特別メニュー……といってほかの部員よりも筋力トレを数種類追加しただけのものだった……をこなして三ヶ月。身体は絶好調、走行タイムも安定してきた。

河合は、おまえのことはなんでもかんでも心得ていると豪語していた。

なんといったって彼は、ひろの『過去二年間、どの記録会でどんな記録だったか、ぜんぶそらでいえる』し、彼女の『生年月日、血液型、平熱、心拍数、バイオリズム周期、スリーサイズ、身長、体重、昨日のお弁当のおかずまで……直近の考査の出来の場合もある……』頭の中にインプットされ、新情報は随時更新されているのだ。

月経周期までつかまれているらしい、とわかった時は思いきりぶん殴ってやりたかったが、お気楽を絵に描いたような、邪気のない河合の顔を目の前にすると、気がそがれてしまう。

もしかして、あたしのことぜんぶわかってる、っていうのは、本当かもしれないとひろは思った。彼の練習メニューはひろの心身にぴったりと合っていたし、結果は高校総体全国大会出場選手に決定したことで示されることになったのだった。

134.

《……そうだと》と、それは言った。

《彼はおまえのことをよくわかっている。おまえと、おまえをとりまくものすべてを事細かに観察し、おまえが存分に力を発揮できるように、日夜綿密な調整をおこなっている。おのれのことはすべて棚にあげて、な。おまえは、彼の夢なのだ——》

その言葉使いは男のようだった。だが、それは女だ。雰囲気、波動が女性的なのだ。ひろはそう感じていた。それは女だ。まちがいない。

《おまえは彼、河合ヤスオの夢だ——》

河合ヤスオ？ それ河合くんの名前なの？

《そうだ。……知らなかったのか？》

知らなかった、っていうか、男子のフルネームなんてあんまり興味ないもん。へえ……ヤスオっていうの……

それにしても——

河合くんの夢だ、っていわれてもねえ……というのが、ひろの正直な気持ちだ。

じぶんの夢ならじぶんでなんとかするのが筋ってもんじゃない？ ひとの夢や期待かけられる方の身にもなってよ。

《彼は百秒を十一秒で走れるような身体を持っていない。走るのはおまえだ。彼の役目は、彼の頭、手腕、人脈、あらゆるものを使い利用して対象をサポートし、フォローしバックアップすることだ。それが彼の能力であり、彼の喜びなのだ》

ふーん……

《縁の下の力持ちという言葉がぴったりの人間だ。調子がいいので目立ちはするが、それはべつに重要なことでもなければ本質的なことでもない。彼自身がその能力を生かして前面に出ることなど、ほとんどありえない》

あなたは どうして河合くんのこと、そんなに よく知ってるの？

ふふふ……と、それは笑った。あごを引いた上目遣いの表情がありありとみえるようだった。

《知っているのは、河合のことばかりではない》意味ありげに、それはそう言った。

135.

神官を父に持ち、神社という磁場の特殊な場所で育ったひろはちょっとした霊視が利いた。常人には見えないものが見え、聞こえないものが聞こえてしまうのだ。

その最たるものが西ノ宮奈々子との交流だったのだが、死者とのあれほど鮮明な交わりはあとにもさきにもそれ一度きりだった。

六月、ひろが県大会兼県予選を終えた翌週の日曜日、宮司は娘を実家へ呼んだ。地方ブロックの大会まであまり日がなかったが、練習は休みだったし、とにかく妙なものがとり憑かないように、お祓いをしておこうというのだった。ひろが求婚されている、という話を詳しく聞いておきたかったこともあった。

「桧山君というと、富夢(とむ)くんのところでアルバイトしてた彼か——」

宮司にとっては、それよりも『湖の主』が連れてきた彼なのだが。

「おまえ——どうするつもりだね？」

陸上の話題では明るかったひろの表情が硬くなった。ちょっと首を振って、私は……、と目を伏せた。

「桧山さんが約束守って会いにきてくれただけで嬉しかった……それだけで十分だった。……だから、そう……結婚しようって……言われた時はすごくびっくりした、信じられなかったわ」

「……ふむ」

「信じられなくて、びっくりして、とまどったけど……でも、やっぱり嬉しくて、そう望まれて彼のところへ行けたらどんなに幸せだろう……って」

「彼が好きなんだね？」

「……ええ」

「なんだ、あんまり嬉しそうじゃないじゃないか」

「だって……！ 彼、オーストラリアにいるのよ、となりの町じゃないのよ！」

「ああそうらしいね」

「修学旅行で行ったけど、すごく遠いのよ、飛行機で十時間もかかる！ 季節だって日本と逆で！」

「だからなんだね」

「……だから……私がそんなところにお嫁にいくの、お父さん、反対じゃない？」

「おまえは、父さんが反対したら諦めるのか？」

「だって……」

「ひろ、おまえの気持ちは、どうなんだ？」

「私の気持ち……」

「それが第一じゃないかと父さんは思うんだがね」

「彼のことは好きなの。でもお父さん、私彼のことよく知らないのよ」

「……そりゃ、困ったな」

父と娘がそんな会話をして、しばらく経ってからのことだった。それが現れたのは。

9・「Hiro's summer-1」

10・「Hiro's summer-2」へ続く

あとがき

青春ですねえ。

河合くんみたいなマネージャーがいたらありがたいだろうなあ、でも…うつとうしいだろうなあ…

2025年4月2日 記

奥付

リ・コンストラクション

第九章 Hiro's summer-1

2025年 4月5日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)
[Designer](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社